13　次の文章をよく読んで、後の設問に答えよ。

〈大阪公立大〉二〇二二年度出題

　昔、京によるべのない若い女がいた。宮仕えをしていたものの、生活は苦しく、毎月、（現在の奈良県）の寺に参籠しては、本尊の観音に貧しさを訴え、救いを求めていた。（当時、長谷寺には多くの人びとが参籠し、本尊の前で夢のお告げを求めて夜通し祈願を行うのが常であった。）しかし、三年たっても効験はなく、女の暮らしぶりは悪化の一途をたどる。女は今回が最後の参籠と心に決め、長谷寺に向かった。その夜、本尊の観音の前で祈念するうち、女は夢を見る。

　さて、夢のに、僧のいみじく尊く、年たけ、徳至れりと見ゆるが、で給ひて、「あはれに思ふぞよ。恨めしくな思ひそよ。そのの方にしたる女房のを、やをら取りて着て、早く起きて帰りね」と仰せらるるありけり。夢めて思ふやう、「㋐あさましのわざや。はてはては人の物盗むほどの身のにてさへ侍りけるよ。たとひ取りたりとても、一つはいくほどの事かは侍るべき」とは思ひながら、「さりとては、㋑やうこそはあるらめ。さばかり身をまかせてり侍らんには、たとひ見付けられて、いかなる恥を見るとても、それをだにも仏の奉公にこそはせめ」など思ひて、後の方を見るに、まことに、ひき着てねたる女房あり。やをら引き落として取るに、さらなり、仏の御はからひなれば、㋒なじかは人も知らむ。

　さて、取りて着て、やがて出でにけり。胸うちつぶれて、わびしくも悲しけれども、念じ返してのほどまで出でにけり。ろに物いとののしりて来ければ、「あな悲し。①さればこそ」と思ひて見れば、この事あやむべき人にはあらで、馬に乗りたる者のあまたまかり出でけるなるべし。

　さて、この馬に乗りたる男の言ふやう、「あのに見ゆるは、女房にておはするにこそ。いかに夜深くはただ一人出で給ふにか。など着たるは、ことよろしき人にこそ侍るめれ。あれとどめ聞こえよ。馬に乗せてからむ所まで送り聞こえむ」と言ひけり。

　さて、供の男、走り付きて、このよしを言ひければ、そら恐ろしけれども、ただ仏を頼みて、「さらば、さも」とて乗りにけり。夜もめきて、人顔見ゆるほどにて、この女を見れば、②我が浅からず思ひしものの病にひてせにしに、つゆもはず。喜びて、具して行きにけり。男の国の、人に仰がれたる者にてぞ侍りける。何事もしき事なかりけり。

　さて、この女を㋓またなくいみじきものに思ひて、年月を送りけり。かかるに、この男、京にるべき事ありて、言ふやう、「これに独りおはせむも、月日もいたづらに覚えなむ。京に親しき人はなきか。かつは、かやうにもなくかきくらしてしも、㋔いぶせくも思ふらむ。共に上りて、さやうの事もらめばや」と言ひけり。③この女、親しき者一人もなけれども、さすが、ありのままに言はむもいかがおぼえけむ、「姉にてありし者こそただ一人侍りしか。さらば上りもせむ」とて、出で立ちけり。男、さまざま姉のとて、物どもあまた用意などしてけり。

　さて、上りてより京に入りぬ。胸うち騒ぎて、「よしなきあだことを言ひて、跡なき事よと思はれなば、身もいたづらになりぬべし。また、仏の照らし給はむ事もれあり。④何のはしにかくは言ひけるにか」と悲しくて、条わたりになりて、「しばし待ち給へ。このほどを訪ねむ」と言ひて、いたくならぬ家の、いと古びて見ゆるがに車寄せなどさるほどにしたるが、いたく騒がしくもなくて、うちしめりたるやうなるありけり。そこにてより降りて、さし入りて見るに、ののありけるに、「はこれにおはしますか」と言ひければ、「おはしますめり」と言ひけり。「立ち出で給へ。物申さむ」と言はせたれば、四十ばかりなる女房、いたく思ひくたすべくもなきに出でて、「誰にかおはする」と言ふ。この人、「申すにつけてり多く侍れど、この二三年に侍りつるが、のまかり上りて侍るが、『親しき者やある。そこにまらむ』と申し侍るなり。これを姉にておはする所と申さむは、いかが侍るべき」と言ひけり。この、「さらに憚りなし。くそのよしを聞こえ給へ」と言ひつ。

　さて、この家に入りて、の用意の物ども内へりてけり。

　さて、旅の具どもしたため、のどめて後、内より呼びければ行きぬ。主人の女の言ふやう、「さても、いかに侍る事にてありしぞ」など問ひければ、ありのままに初めより語りつ。これを聞きて、この主人、よよと泣きりけり。怪しと思ひて、「いかに」と問へば、「かの初瀬にて、衣失ひてありし者は、我にて侍るなり。いとはぬ心に、音の誓ひを仰ぎて詣り侍りしほどに、ある事はなくて、あまりさへ衣を失ひて侍りしかば、⑤人のはかなさは、何となく恨めしき心地して、その後は歩みを運ぶ事もなし。家のさまも、日に随ひて数ならずのみなりゆきて、夫も亡せてさへ侍れば、思ふかたなくて侍りつるなり。我が身ばかりにてはいかにも叶ふまじく侍りければ、せめても行く末を照らし給ひて、かやうにさまざまの物どもを賜はり侍る事、一たびは御身の情けと思へども、二たび思ふには、仏の賜はせたる物ぞかしと思ふに、とにかくにせきかねて侍るなり」と言ふ。これを聞きて、この女、声も惜しまず泣きけり。二人、いといたう泣きまさりて、なごむるかたもなかりけり。

　さて、「さるべき昔の事にてこそ侍るらめ。今よりはのにつゆちり違ふまじ」など、ねんごろに頼めつ。また、頼む程なれば、夫にもかすめ果つべきにあらざりければ、ありのままに知らせつ。夫もいみじくあはれがりて、いよいよ仏の御はからひなれば、浅からずぞ思ひける。

（『閑居友』より）

〔注〕　（一）――長谷寺の門前近くを流れる川。

　　　　（二）衣など着たる――身分ある女性が外出の際、顔を隠すために衣を頭から背にかぶる行為（）をいう。

　　　　（三）の国――旧国名。現在の岐阜県南部をさす。

　　　　（四）――現京都市東山区の地名。東国から京に入る経路に位置する。

　　　　（五）三条わたりになりて――粟田口から西に進み、京の中心部に入ったことをいう。

　　　　（六）に車寄せ――平門は、柱二本で、屋根の上を平らに造った門。車寄せは、来客が牛車を寄せて乗り降りする場所。

　　　　（七）馬より降りて――ここで馬から降りるのは女。

　　　　（八）――開き戸。

　　　　（九）観音の誓ひ――経典に説かれる、あらゆる人びとを救済しようという観音の誓い。

◎問１　二重傍線部（二箇所）の「女房」は同一人物である。この人物は本話の後半部で再び登場するが、その際に発した最初の言葉を本文中から抜き出せ。

問２　傍線部㋐から㋔をわかりやすく現代語訳せよ。

問３　傍線部①「さればこそ」とは、女のどのような思いを表しているか、わかりやすく説明せよ。

問４　傍線部②「我が浅からず思ひしもの」とは誰をさすか、簡潔に答えよ。

問５　傍線部③について、女が「ありのままに言はむもいかが」と思ったのはなぜか、わかりやすく説明せよ。

問６　傍線部④「何のはしにかくは言ひけるにか」について、女が自身の発言をこのように後悔している理由を、二点に分けてわかりやすく説明せよ。

問７　傍線部⑤「人のはかなさは、何となく恨めしき心地して、その後は歩みを運ぶ事もなし」について、

　　（１）「歩みを運ぶ」先はどこか、簡潔に答えよ。

　　（２）「何となく恨めしき心地」がしたのはなぜか、わかりやすく説明せよ。

問８　本話全体を通じて、観音は主人公の女にどのような救いをもたらしたと考えられるか、わかりやすく説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　誰にかおはする

問２　㋐＝Ａ驚きあきれたＢことだなあ

Ａ＝５〔「意外だ」も可。〕

Ｂ＝５〔「わざ」の訳、または詠嘆の間投助詞「や」の訳が適切でなければ０。〕

　　　㋑＝Ａ何かわけがＢあるのだろう

Ａ＝５〔「わけ」は「事情」「理由」なども可。〕

Ｂ＝５

　　　㋒＝ＡどうしてＢ人も気づくだろうか、Ａいや気づくはずがない

Ａ＝８〔反語表現が不明確な書き方ならば０。〕

Ｂ＝２〔「気づく」は「わかる」なども可。〕

　　　㋓＝Ａこの上なくＢ愛しい者

Ａ＝２

Ｂ＝８〔「愛しい」は「大切な」も可。〕

　　　㋔＝Ａ気がかりにもＢ思っているだろう

Ａ＝７〔「気がかりにも」は「心配にも」も可。〕

Ｂ＝３

問３　Ａお告げに従い衣を盗んだけれども、Ｂ心配したとおり人に気づかれて追われることになってしまったとＣ嘆く思い。

Ｂの内容が不明確ならば、全体０。

Ａ＝３〔「衣を盗んだこと」が記されていれば可。〕

Ｂ＝５〔「人に追われる」の内容がなければ０。〕

Ｃ＝２〔「困惑する思い」なども可。〕

問４　Ａ男が深く愛した、今は亡きＢ妻。

Ａ＝５

Ｂ＝５〔「愛しい女性」でも可。〕

問５　Ａ自分を相応の身分の女だと思っている夫に、実はＢ身寄りもなく貧しい生活をしていたという事実を知られたくなかったから。

Ａ＝２〔「夫」のみでも可。〕

Ｂ＝８〔単に「事実を知られたくなかった」では減点７。〕

問６　・Ａ自分のついたが露見して夫に見限られてしまったならば、Ｂ生きていくことはできないだろうと思えたから。

Ａ＝６〔「夫（男）」に「噓が露見する」または「見限られる」内容が記されていなければ０。〕

Ｂ＝４〔「いたづらになる」の意味が不明確ならば０。〕

　　　・Ａ自分のついた噓を仏はおわかりになっており、Ｂそれをめる仏罰が下ることを恐れたから。

Ａ＝６〔「仏」のことが記されていなければ０。〕

Ｂ＝４〔「恐れた」は「心配した」などでも可。〕

問７　（１）＝初瀬

「長谷寺」も可。

　　　（２）＝Ａ救いを求めて長谷寺に参籠して観音に祈りを捧げたが通じることなく、Ｂ衣までも盗まれてしまったから。

Ａ＝５〔「祈りが通じなかった」という内容がなければ０。〕

Ｂ＝５〔「衣を盗まれた」という内容がなければ０。〕

問８　Ａ土地の人々から尊敬されている男から愛情を受けて夫婦となり、Ｂ何の不自由もない生活をするようになったことと、Ｃ衣を盗んだ女からは恨まれるどころか本物の姉妹同様の深い縁を結ぶことになったこと。

Ａ＝３〔「男と夫婦となった」という内容がなければ０。〕

Ｂ＝３〔「経済的に豊かになった」という内容がなければ０。〕

Ｃ＝４〔「本物の姉妹同様の縁を結んだ」という内容がなければ０。〕

【現代語訳】

そうして、夢の中に、僧でたいそう尊く、高齢で、徳の極致に達したと見える僧が、姿を現しなさって、「気の毒に思うぞ。（だが）恨めしく思ってはならない。その後ろの方で寝ている女房の薄衣を、そっと静かに取って着て、早く起きて帰ってしまえ」とおっしゃることがあった。（女は）夢がめて思うことには、「問２㋐驚きあきれたことだなあ。挙げ句の果ては（私は）人の物を盗む程度の前世の報いでまでもございましたよ。たとえ取ったとしても、衣一つはどれぐらいの（生活の足しになる）ことでございましょうか」とは思いながら、「とはいえ、問２㋑何かわけがあるのだろう。これほどまで身をまかせて参拝しました張り合いには、たとえ見つけられて、どんな恥を見るとしても、せめてそれだけでも仏に対する奉公（のしるし）にもしよう」などと思って、後ろの方を見ると、本当に、衣をすっぽりかぶって寝ている女房がいる。そっと（衣を）引き落として取ると、もちろんいうまでもない、（これは）仏のお計らいなので、問２㋒どうして人も気づくだろうか、いや気づくはずがない。

　そこで、（女は衣を）取って着て、そのまますぐに（寺から）出てしまった。胸がどきどきして、（自分のしたことに）やりきれなくも悲しくもあるけれども、我慢し気を取り直して、初瀬川の辺りまで逃れた。（すると）後方で人がたいそう大声で騒ぎたてて来たので、「ああ悲しい。思ったとおりだ」と思って見ると、このことを怪しむつもりの人ではなくて、馬に乗った者がたくさん（寺から）下がり出たところであるようだった。

　そして、この馬に乗った男が言うことには、「あの前に見える人は、女房でいらっしゃるようだ。どうして夜更けにただ一人でお出ましになるのか。衣を頭からかぶっているのは、相応の身分の人でございましょう。あの方を止め申し上げよ。馬に乗せて明るくなる所まで送り申し上げよう」と言った。

　そこで、供の男が、（女のもとに）走りついて、このことを言ったところ、（女は）無気味で怖いけれども、ひたすら仏を頼りにして、「それならば、その（おっしゃる）ように」と言って（馬に）乗った。夜もうっすらと明けてきて、人の顔が見える頃に、この女を見ると、自分が深く愛した妻で病を患って亡くなった妻に、まったくそっくりである。（男は）喜んで、（自分の国まで）連れて行った。男は美濃の国の（人で）、（土地の）人に尊敬されていた者でございました。すべてのことに不足することはなかった。

　そうして、この女を問２㋓この上なく愛しい者に思って、年月を送った。こうしているうちに、この男は、京に上らなければならないことがあって、（女に）言うことには、「ここに一人いらっしゃるのも、月日が虚しく過ぎるようにきっと思われるだろう。京に親しい人はいないのか。また一方では、このように行方もわからず姿をくらましてしまったことも、（その人は）問２㋔気がかりにも思っているだろう。一緒に上京して、そのようなこと（＝女が美濃で暮らすようになったこと）も明らかにしたい」と言った。この女は、親しい者は一人もいないけれども、そうはいうもののやはり、ありのままに（本当のことを）言うようなこともどうかと思われたのだろう、「姉であった者がただ一人おりました。それならば（一緒に）上京しよう」と言って、出発した。男は、いろいろと姉への贈り物といって、品々をたくさん用意などした。

　そうして、上京して、粟田口から京に入った。（女は）気持ちが動揺して、「つまらないいい加減なことを言って、根拠のないことよと思われたならば、（わが）身も（夫に愛想をつかされ、生きる甲斐もなくなり）むなしくなるに違いない。また、仏がご覧になるようなことも心配がある。何がとりいてこのような噓は言ったのだろうか」と悲しくて、（そのまま進んでいくと）三条の辺りになって、（女は）「しばらくお待ちください。このあたりを訪ね（て聞いてみ）ましょう」と言って、あまり賤しくはなさそうな家で、たいそう古そうに見える家が、平門に車寄せなどを相応な様子で設けていたけれども、あまり騒々しくもなくて、ひっそりと落ち着いている様子である家があった。そこで（女は）馬から降りて、入って見ると、女の童がいたので、「ご主人様はこちらにご在宅でいらっしゃいますか」と言ったところ、「いらっしゃるようです」と言った。「表に出てきてください。もの申したい」と取り次がせたところ、四十歳ぐらいである女房（で）、あまり見下げるほど（低い身分）ではない女房が、開き戸に出て、「どなたでいらっしゃいますか」と言う。この（訪ねてきた）人が、「申し上げるについては遠慮が多くございますが、（私は）この二、三年田舎におりましたところ、夫が京に参上しますときに、（私に）『親しい者がいるか。そこに泊まろう』と申すのです。こちらさまを姉でいらっしゃる（方の）住まいと申し上げるようなことは、いかがでございましょうか（、お許しいただけますか）」と言った。この女主人は、「まったく遠慮はいりません。早くそのことを申し上げなさい」と言った。

　そこで、この家に入って、先の（贈り物としての）用意の品々を（家の）中に届けた。

　そして、（女は）旅装を（解いて）きちんと整理し、（一行を）落ち着かせた後、内から（女主人が）呼んだので行った。女主人が言うには、「それにしても、どのような事情でございましたか」などと尋ねたので、（女は）ありのままに（事の）初めから語った。これを聞いて、この女主人は、おいおいと泣き続けた。（女は、女主人があまりに泣くので）不思議だと思って、「どうしたのですか」と尋ねると、（女主人は）「あの初瀬で、衣を失くしていた者は、私でございます。たいして願いが叶わない（ことを嘆く）気持ちから、観音の誓いを仰いで参詣しましたときに、（ご利益を）得ることはなくて、そればかりか衣を失いましたので、人間の愚かさは、何となく恨めしい気持ちがして、その後は（長谷寺に）足を運ぶこともありません。家の状態も、日に日に（貧しくなり）取るに足りなくなる一方で、夫までも亡くなりましたので、何を思う頼りもなくなりました。わが身だけではどのようにも（暮らしを）支えることはできそうもございませんでしたので、せめても（のこと）に将来を明るく照らしてくださって、このようにさまざまの品々をいただきますこと、一度はあなた様のお情けと思うけれども、もう一度思い直してみると、仏が下さった物なのだと思うので、とにかく（涙を）止めかねてございます」と言う。これを聞いて、この女は、声も惜しまずに泣いた。二人は、とてもはげしくますます泣いて、なだめようもなかった。

　そして、「そうなる前世からの宿縁なのでしょう。今からは本当の姉妹に少しも異ならないでいましょう」など、心を込め誓った。また、頼りにしている人なので、（また）夫にも欺き通せるはずでもなかったので、ありのままに（事情を）知らせた。夫もたいそう感慨深く思って、ますます仏の御考えなので、浅からず（この度の縁をありがたいものと）思った。